

第45回関西支部勉強会

「研究者がみた中央省庁と大学のミスコミュニケーション —モノゴトが決まる仕組み 決まらない仕組み—」

日時 2014年9月8日(水) 18:00-20:00

場所 京都大学 吉田泉殿

ゲスト 塩瀬隆之氏

2014年7月1日より京都大学総合博物館 准教授(技術史担当)

2014年6月まで経済産業省 産業技術政策課 課長補佐(技術戦略担当)

人数 27人

お話の詳細：

1. 「はたらく」ことと「まなぶ」こととの距離を近づけたかった
2. コミュニケーションの基本は、知らない言葉を知っている言葉の組み合わせで理解すること。相手の文法(言葉づかい)がわからなければ、どう伝えてよいかわからない。
3. 霞が関の考える「よい提案」と大学研究者が考える「よい提案」の感覚にズレがある。官も学もお互いの文法をもっと知った方がよい。
4. 役人も国をよくしたいとももちろん考えている。しかし幹部世代に比べて若手世代が、省外に話を聞きにいける有識者が少ない。人事交流を含めて人が出入りする必要があるが、まずは出会う場所を増やしたい。
5. 10年後20年後の長い時間スパンで社会ビジョンを提示し、政策立案を助ける有識者の数が不足している。選択肢を増やすためにも、関西で政策デザインの議論が日ごろからできる場所、関係が必要。
6. URA(学術研究支援者)は、研究者プロデューサーとして産官学の橋渡しをもっとしてもらいたい。研究費を増やすことも重要かも知れないが、研究者を社会にアピールし、研究成果を社会に還元するという姿勢で。
7. 地域の社会課題に向き合うのは自治体という単位、首長のトップダウンで変わる。各地域から変革の兆しを増やしていくことが重要。

科学コミュニケーション研究会 関西支部有志

第45回 記録・運営担当：加納 圭(滋賀大学/京都大学)